

この書は、この意味で、われわれに考える手がかりを与えてくれたことになる。

(洪 炯圭)

John Gordon Williams, *Worship and the Modern Child* :
a Book for Parents, Clergy, and Teachers, London,
National Society & S. P. C. K., 1958, 224 pp.

本書の基本的な前提は2つである。(1)20世紀の科学的業績がいかにあっても、人間性は根本的には不変であること、すなわち、人間は礼拝のために造られており、従って、神なくしてはいかなる恒久的幸福をも見出しえないこと、(2)現代的状況において、キリスト教信仰を教えるには、以前には決して直面しなかったような問題がもたらされることを、我々は認識しなければならない。これらの枠組の内において、著者は人間の現在の状況に対する教会の恒久的な回答を述べようとするのである。

著者は、数人の子供の親であり英国聖公会の parish priest 及び学校教師の経験をもち、BBC放送において宗教番組を担当した経験をもっている。

本書においては4つの仮定が立てられ、最初から最後までずっと展開されている。(1)神に関しては、神は一切の生の源泉である。我々の生のいかなる領域も、神から離れては真に営まれることはできない。神に対する信仰のみが一切の生に意味を与える。(2)礼拝したり、宗教教育を受けたりしうる子供の能力に関しては、……感傷的な、悪化した、稀薄になった(そしてまた時には異端的な)考えは充分ではない。「……そして我々は、子供の祈りの生活が、我々がしばしば設けるような『単純な』制限によって余りにも多く妨げられているが、そのようなことがないように警戒しなければならない。我々は『単純』という言葉をあまりにもしばしば『容易に物事を理解しうる』という意味に解する。そして我々は宗教の偉大な真理と経験とを、想定された『理解力』の想定された範囲内に押し込めようと努力することによって、子供の開かんとしている精神に無数の害を与えるかも知れないのである」(46ページ)。(3)信仰に関しては、それはキリスト教的礼拝と行動にとってまったく基本的なものである。(4)礼典に関しては、バプテスマと聖餐の中心性と重要性とが大いに強調されている。

最初の4章において、礼拝と祈禱に関する重要な神学的背景が簡潔明瞭で、容易に理解しうる形で与えられている。我々は、後程論じられる問題に対する実際的な接近に至るためにこれらの章を飛ばさずにしなければならぬ。これらの初めの章は、両親にとっても、教師にとっても実際いかなるキリスト者にとっても、特に役に立つものであろう。単なる「感情の高まり」は礼拝でもなく、礼拝の代用物でもないことが極めて明らかにされている。

実際的な問題を取り扱っている章は家庭における子供の幼児時代から始まり、教会の役割にまでひろがって行く。キリスト教教育は会衆の関心事でなければならないという点に対してかなりの注目が払われている。著者は、幼児洗礼が形式主義に堕していることに対

しては大いに批判的である。そこにおいて、非キリスト教徒の両親と名付け親とは口先きだけで、なんらはたす気のない誓約を行うのである。著者はこの嘆かわしい状態を改良するための提案をする。彼は主として聖公会の人々に対して語りかけているが、我々の中で日本の聖公会ではない教会に属するものもまた、彼の議論によって幼児洗礼の意義を深く再考するように挑戦されるのである。

著者が与える2つの興味ある、かつまた実際の提案は Parish Communion (第10章) 及び、教会の熱心な会員が、キリスト者ではない家族の子供の代父母をひきうけることである。

第11章では学校における礼拝がとりあつかわれ、とりわけキリスト教主義の学校に対して特別な言及がなされている。著者は学校礼拝の限界と共にその役割と機能とを素描している。この章は日本の読者にとって、特にキリスト教主義の学校の管理と宗教生活とにならずさわっている人々にとって、最も貴重なそして最も有益なものであろう。

本書は主としてキリスト者である両親のためのものである。非キリスト教的な家庭からきている子供達が圧倒的に多いクラスをうけもつ（日本においてはしばしばそうであるように）教会学校教師は、本書を読むことによって多くの挑戦と非常に困難な問題とを与えられるであろう。我々みんなが本書において提供されている礼拝と祈りに関する洞察から多くのことを得ることができるけれども、本書は主として聖公会の読者に与えられたものである。（ジーンB.ロイド、森 泰男訳）

Einar Molland, *Christendom, the Christian Churches, their Doctrines, Constitutional Forms and Ways of Worship*, A. R. Mowbray & Co., 1959, 418 pp.

本書の著者モーランド博士は現在オスロ大学の教会史教授で、英国、フランス、ドイツ等に学んだ経験を持ち、それらの国の教会の事情に通じている。彼は1933年に按手を受領した教職でもある。

本書のねらいは、著者も自序において述べているように、キリスト教界のすべての教会と教派を公平に記述することである。このような研究は比較信条学 (Konfessionskunde) の領域に属する。比較信条学は16世紀の論争神学にその端を発するが、当時の主な関心は諸教会の教理的相違を強調し、自己の立場を正当化することであった。しかしそのような独断はやがて超えられ、「なぜ」そしてまた「いかにして」そのような相違が出てきたかという歴史的研究が進められるようになった。更に人々は、教会全体をもうらす敘述を教理の面に注目するだけでは十分ではない、教会の特徴は教理、教憲（教会の組織）、礼拝様式及びエトス（ある特定の信仰告白に関連した特徴的な生活態度）の4つの面から見られなければならないことに気づいた。本書の著者は、諸教会を比較する際、いかなる独断をも排して、客観的、記述的研究を進める。そこで客観的であろうとして著者が採用する方法は、各教会が中心的と考えているものに著者自身が立ってその教会を敘述することであ